第三回「文芸思潮」現代詩賞　発表

第三回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございました。おかげさまで、全国および海外から六二三名のご応募をいただき、たいへん充実した選考となりました。心から御礼申し上げます。

応募作の中から、まず選考委員会予選担当による第一次予選、第二次予選の選考が行なわれました。それを通過した作品を対象に、河林満、池田康、五十嵐勉の各選考委員により、第三次選考、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定しましたので、ここに発表させていただきます。

なお、今回は応募数が多かったことから、すぐれた作品成果をより広く顕彰するため、「佳作」を設けることにしました。

奨励賞および佳作作品の中にも多くの方に読んでいただきたい作品がありますので、それらの作品も、順次「文芸思潮」ウェーブに掲載させていただく予定です。御期待ください。

現代詩賞の授賞式は、銀華文学賞、エッセイ賞と併せて、明年一月二十六日午後二時より三鷹産業プラザにて行なう予定です。受賞者以外の方も受け付けておりますので、お誘いの上よろしく御参集ください。

第四回「文芸思潮」現代詩賞は、明年二〇〇八年も今年とほぼ同じ要領で募集を行ないます。締め切りは五月三十一日です。どうぞ奮って御応募ください。

第三回「文芸思潮」現代詩賞

当選

「王国」「顔」　富　哲世（兵庫県神戸市）

優秀賞

「禍根」「錦の座蒲団」「紙の神に」　土田多良無季（岡山県倉敷市）

「就眠儀式」「徘徊録」「水に、眠る」　溝口愛子（長崎県大村市）

「目／灯台」「トッカリショ」「おばあちゃん」　佐々幸子（北海道室蘭市）

「想ひ出煙草」「あやかしピアノ」「虚ろふ紙芝居少年」　斎庭京壱（熊本県熊本市）

「原爆ドーム」「鬱病女の綴りごと」　福田静代（広島県尾道市）

奨励賞

「木登り―別れた母に寄せて―」　大江　豊（愛知県一宮市）

「瓶詰めジャムができるまで」「理科と心理のティータイム」「記憶文章」　赤枝　薫（沖縄県島尻郡）

「若葉」「毎日は生きてると朝日が言う」「生身」　小川周一郎（茨城県水戸市）

「墨流れ」「死亡広告」「飼育」　光城健悦（北海道室蘭市）

「天守閣」「日々の戦争」　二条千河（北海道札幌市）

「夏の谷で」「不安な夢のように 不安な風景に」「思惟の行方」　佐山広平（愛知県春日井市）

「スモーカ」「アイスクリーム」　三浦睡蓮（東京都府中市）

「天に唾する」「鳩」「天気の時は」　山川方子（奈良県橿原市）

「地下鉄の中の空気」「勇ましい同人誌」　三重ユメオ（三重県桑名市）

「すばらしい子ばかり」　川田政通（福島県いわき市）

「覚悟」　中村礼子（岐阜県大垣市）

「かぐわしい幻」「透き通った投石」「囚人魚」　川畑和嗣（北海道札幌市）

「せせらぎの追想」「破片」

選評

切り裂く詩と容器の詩

五十嵐 勉

第三回現代詩賞には、昨年のほぼ三倍の作品が寄せられた。小学生の年少者から九二歳の老人まで、この日本には実に幅広く詩作エネルギーが渦巻いていることを実感した。うれしかった。

応募者数に比例して、数の上では、作品が増え、技巧も安定してきたように見える。全体のレベルは上がっていると言えよう。しかし、昨年はリストカットを想わせる希求型の詩がかなりあったように、個々のインパクトはかなりあった。しかし今年は技術的なレベルは高いものが多かった分おとなしい作品が多く、インパクトに欠けた。これは今回の作品全体の印象である。詩はもっと攻撃的で、解き放たれた矢のように真っ直ぐ心を射抜くものであってほしい。ためらいや遠慮はいらない。裸の、自分だけの言葉で世界を射抜いてほしい。神をも貫き、切り裂くものでなければならない。その鋭さに欠けた。

当選作、富哲世氏の「王国」は、切りつけ、貫くインパクトというよりも、時間のうねるような包括の力で造形している容器の詩である。現代の風化の景色を描きながら、沈潜する過去の流れ、そこからときおり亡霊のように頭をもたげる亡き者たちとの時間の交錯が、包容力のある厚い絨毯のような感触で織りなされてくる。この縦糸と横糸を紡ぐ言葉の流れが強靭かつしなやかで快い深い交響音となって現在を駆け抜けている。その流れは詩の技巧として一流である。一つの息として最後までつながり、造形を遂げている点を評価したい。これに最後のクライマックスと着地とが盛り上がって決まればさらによくなっただろう。

優秀賞の溝口愛子氏は昨年に続いての入賞で、昨年よりもその造形力は大幅に強化された。これを賞揚したい。「就眠儀式」は、内省の深まりを感じさせる。展開の幅を増した今後は、むしろ短い言葉の方が心を切る強い力となることを身につけて、その刃先をしっかり研ぎ澄ませていってもらいたい。内部の流動もそれによってよりいっそう強い力を得て迸り出るはずだからである。

今年の受賞の特徴は、高年齢層の作品と青年層の作品とが並んでいる姿である。士田多良無季氏は九二歳。応募者中でも最高齢である。「禍根」というこの気骨のある詩は野ざらしの人骨の軋みが共鳴しているような、六十年前の戦争への悔悟が風の音、骨を鳴らす音として鮮明に聞こえてくる。その九二歳のみずみずしい感性は歴史を切っている。老齢にしてなお世界を切る力のある、詩の可能性を大きく広げて見せてくれた。

佐々幸子氏は七四歳。「トッカリショ」に風土の力がある。海の男や生き物たちの太い声が聞こえてくる。北海の生命力が息づいている。七四歳という高齢にもかかわらず、詩の感性は弾力があり、生々しい。

これらに対し、一九歳という若さで、優秀賞を受賞したのは、斎庭京壱氏である。女性であり、その詩の世界はまだ華奢で、ひ弱な印象を否めない。ただ、その言語造形の才能は一つの可能性を感じる。可能性に賭けてみたい気はする。魂に迫るような言葉はここにはなく、早熟で誠実な言葉の駆使は技量を感じるが、詩人として立つには覚悟と足場が足りない。これからだろう。

福田静代氏の「原爆ドーム」は一見ありふれた原爆詩にも受け取られるが、「鬱病女の綴りごと」を併せて読むと、この作者の一貫した態度のうちに怒りの基盤があることが理解される。そこに信頼を覚えた。原爆の体験が風化し、そこに核兵器の恐怖が忘れ薄められていくことを考えるとき、実際の体験がない者がその感情と怒りとを受け継いでいくことは、限界があるにしろ大切なことだ考える。核兵器の恐怖は現在も色濃く世界を蓋っているからである。作者には、もっと強く、もっと天に届く声として、今後も引き絞った矢を放ってほしい。ただ一度の感動によるものではなく、その土地の存在から集まり来る声を吸収して、天へ駆け昇らせてほしい。その持続は困難であるが、一度それに触れたものの責務と考える。

奨励賞では小川周一郎氏の作品に吐く息の透明度を感じた。この誠実さがより透明な結晶をなせば、光り輝くものになるだろう。たいへんだが持続してほしい。

奨励賞のなかでも、また他の入賞者のなかでも、現代の都会生活風の洗練されたやわらかい詩作品がいくつかあり、それはそれで楽しませてもらった。赤枝薫氏の「瓶詰めジャムができるまで」「理科と心理のティータイム」、三浦睡蓮氏の「スモーカ」などはこの領域である。快い酔いはそれなりの味わいがある。

二条千河氏の「天守閣」は、歴史の時間を現在の銃口に重ね合わせている視点は評価できると同時に、詩としての困難さも感じる。そこに氏の独自性があることを認めるが、これが詩として最大の表現の効果を獲得できるものであるかどうかは、議論の分かれるところであろう。氏には歴史に対する壮大な着想がある。この才能をどの方向で生かしていくかは、しばらく迷うはずだが、その経験が大きな基盤になると思う。じっくりとその基盤を築いてほしい。千年の時間を乗せるには、尋常な基盤ではないはずで、時間も労苦もかかって当然である。その苦闘からこそ独自の方法が発見されるだろう。

佐山広平氏は今回は繰り返しの表現が多く、その分テーマへ収斂させていく力を削ぐ結果になった。惜しまれる。また川畑和嗣氏の作品も一つ一つの固形の事物の存在が訴える力が弱まっている。この世界は、廃物も時間の中でしっかり生きている。それを呼び起こす力が詩人の眼であり、創作の力であるはずなのに、その掘削力の弱まりが詩の陰影を浅くしている。

詩人は日々の賭博人である。その日傑作が生まれれば、億万長者よりも豪勢な幸福に包まれる。しかし翌日創作に失敗すれば、文無しのベッガー、地獄の流浪人である。天国と地獄を日々往復するものだ。栄光と悲惨の滝壺人生である。しかしこれを生きるからこそ詩人なのであって、負けてもなお詩に賭博していくエネルギーこそが、詩人の所以である。栄光にすがることなく、なお失敗を恐れずに、果敢に挑戦していく精神こそが、創造であることを確認したい。

佳作

スミマセンと言えば／ニューギニアのセミ／正人　後藤　順
無音の舞台に／命の化粧／的中　藤原ジュン
その音とは／ロープをたぐり寄せたら／お　仲道梨央
あさ／草原を、少年は走る。／雨　岡崎博成
独り言／曖昧なものもの　坂口祐子
紫の目の逸話／些細な自動書記／月と水　切羽
Birth ／The Perfume of Helena ／括弧R　糸桐カイト
歓喜／追憶／看守の詩　久瑠璃窈子
夜更けに／ファーフナーの血／月骨粉　勝井　慧
今ここにいない友のために　末永　逸
祈り／優しい隣人／マラウイ、天国への扉　桜はるらん
マチ針／3月の海／貸してもらえないだろうか　北風ジロー
白昼／静かな場所／疾走　牛坂夏輝
一同起立／余波／さようなら やさしい目　あび
ビードロ／SOS／キミガヨ　増本大二郎
戦争が終わったら／雨好き／バッテリー　上田　卓
時代／向き／現在過去形　スズキケンジ
タイムリミット／こころ／原点　たなかあやこ
戦く／ローカル線／甲府駅　向田若子
眠れぬ夜明け　歳岡冴香

鞭のしなりの暴力

河林　満

現代詩賞の応募者は、六百を超えた。そのうち佳作が二十名、奨励賞が十二名、優秀賞が五名、当選作一名の内訳を得ることができた。

私は、佳作から一行ずつ寸評を加えていきたいと思う。（敬称略）

まず、久瑠璃窈子の作品。「煌めきと苦しみの二重奏に鎮魂歌は賛美歌へと変わる」ことは容易ではない。

糸桐カイトの作品。男のぼく、ありもしない子宮が疼くと感じる感性は優れている。ただ、安易な自分探しに落ち着いてほしくはない。

坂口祐子の作品。「テレビを『消音』にして読んでいます」の感性は面白い。このような人物についてもっと詳しく知りたいと思った。

切羽の作品。白い牝牛の悪意は面白い。

岡崎博成。「あさ」という作品。水のようにひらがなが流れている。生活のけがれもこのまま流してほしい。どこまでも読んでいきたくなるような快感をこの作品は秘めている。

仲道梨央。敬語としての「お」をうたった作品はよかった。最初にお月様と名付けた人に「お」をつけたいという気持ちは素直に伝わってくる。

藤原ジュン。この作者は、なかなか難しいことを言おうとしている。

後藤順。ファミリーレストランの日常の光景。ここに展開されるわかりやすさはある意味で貴重な発見といえる。この作品に、不遇な良心を感じた。

牛坂夏輝。「静かな場所」という作品の「コンクリートの隙間に流れる水を雀が飲む」は、不思議な郷愁を誘う一行だ。

北風ジロー。からだを対象にしてイメージを広げているのが面白い。川端康成の「片腕」という作品を連想した。

桜はるらんの作品。戦火の予感は、どの時期の実感にはらまれたのであろうか。

末永逸の作品。「子供たちの天国」の、この想像力は限りない優しさに満ちている。

勝井慧の作品。「何もしてやしないのです」は誰なのか。日常のおかしみが出ている。

増本大二郎。「新聞の中で僕に手を振っていた」の発見は、重要である。社会風刺の目がある作品だ。

上田卓の作品。私は「戦争が終わったら」という作品を高く評価した。「戦争が終わったらメールを打ちたい」「ケータイをAUに買い換えたい」というのは面白い視点である。すなわち（一九四五年四月　硫黄島）の壊滅から現代を照射するのである。

スズキケンジの作品。細部はよいのだが、いささか大げさなタイトルというか、もう少し細かな小さなものを見つめるところから、そこを深めていったらどうだろうか。まだありきたりの表現であると思う。

たなかあやこ。人間の心、体、生活の暦への想像力、これは貴重である。

向田若子。安心してついて行ける。人生の中に定着した風景をきちんと書く人だ。

歳岡冴香。短いけれども求心力がある。

あび。これは、作者自身が教育の現場にいるところで書かれたものであろうか。六〇年代、七〇年代を感じる。これらの世界は小説でこそ書いてほしいと思った。

次に奨励賞。

中村礼子の作品。ある種の限定をはめて日常を見る美意識はなかなか優れている。

二条千河の作品。戦士の足どりへの想像力は面白かった。

光城健悦の作品。「墨流れは陰に澱む確信犯なのだが？」この作者は詩の確信犯であって、私は奨励賞以上に評価した。なかなか燻し銀の輝きを持っている作品なのです。

小川周一郎。否定と肯定の不ぞろいな歩行というような感想が浮かんできた。

赤枝薫。タイトルに独自の個性が光っている。よい形で自問自答が展開されると読んだ。

大江豊。母の膝枕での耳かきの快楽が生むファンタジーであろうか。しかし、言うまでもなくいつまでも子どもではいられない。

川畑和嗣の作品。現実の中に郷愁をつくり出そうとした意欲は買う。説得力がある。そして、「にわかな客の気配」に怯え続けるのが我々の一方の現実である。

佐山広平の作品。いつもながら言葉のリズムと端正さがある。ここにいてあそこにいるという距離の自由は詩の特権である。そんなことを改めて感じた。

三浦睡蓮の作品。負傷が自傷にまで及んでいて、現代ではそれもある種の正常さと放置されているのかもしれない。全体に時としてユーモアがあり、読者を安心させているのはなかなかのものである。

山川方子の作品。日常の折目正しさ、豊かさへの賛歌が描かれている。

川田政通の作品。日常に対する不機嫌さをこの詩は書いているように思う。生でもなく、死でもなく、前に進むのでもなく、後ずさりするものでもなくという状況への不機嫌さ。

三重ユメオの作品。なかなか社会批評・人間観察がきいている。幾つか誤字があるのが気になった。

次に優秀賞五名。

土田多良無季。お年を言ったら失礼だが、最高齢の詩人である。戦争体験が息づいている。「明け方の夢で白い群衆に手招き」されるシーンは、深く静かで恐ろしい。これも小説で読みたいと思った。ある種のファンタジーであるが、こういったことを小説にした作品に目取間俊の「水滴」がある。芥川賞受賞作である。これは沖縄の悲劇を描いているものだが、ファンタジーが強烈な効果をあげていた。参考にしてほしい。

斎庭京壱の作品。不思議な言葉の感覚を持っている。ある種の老成を感じた。

溝口愛子の作品。妄想は詩の隣人であるということか。

福田静代の作品。原爆を折目正しくうたっていることは評価できる。

佐々幸子の作品。風土の力、やさしさ、話し言葉もしくは伝承の言葉のスタイルを獲得しているといえようか。

最後に当選作の「王国」という作品。

まさに当選作とするにふさわしい風格を持っているといえるであろう。物語性、言葉の緻密さ。ある種の風景描写が心理描写を同伴するリズム感。なかなかのものである。作者の一層の活躍を期待したい。

以上を講評にかえるが、詩というのは書き手も読者も相応の約束事があるようでないような、ある種の暗黙の、情念と理解の交歓を前提にしているといえるであろうか。リリシズムの表白もあれば、時事的なものもあるし、いろんな作品が存在する。私としては人生の体験に根ざした作品を好むけれども、単純な言葉遊びも面白いと思った。

詩の言葉というのは、意味がなくてもよい。しかし、意味を放免された言葉は、ある種の解放、いわば鞭のしなりのようなものに高まっていってほしいと思うのが詩のファンとしての私の願いである。韻律が散文を蹴散らすのだ。その意味では、詩は、ほかならぬ暴力の異名であってもよいのである。

「文芸思潮」授賞式●一般参加歓迎

エッセイ賞・現代詩賞・銀華文学賞／授賞式・祝賀会・懇親会
平成20年1月26日（土）午後二時より三鷹産業プラザにて
受賞者以外の方の御参加も大歓迎です。この機会に選考委員などとお話し下さい。感動の授賞式・楽しい祝賀会にどうぞお出かけ下さい。参加費六千円（飲食費込）
ご出席は、文芸思潮編集部ＴＥＬ〇三・五七〇六・七八四七まで

持続する力動感

池田　康

今回は応募総数も多く、それに比例して最終候補として残ってきた作品数も多かったので平等の条件で読んで評価するのは大変だった。

最終的に上位数名はほぼ同等の評価点で並んだのだが、富哲世さんの「王国」が五十嵐選考委員の強い推挽を受けて当選作となった。その理由は重みと風格があるということだったが、確かに力動感にあふれ、そのダイナミズムが最後まで持続することによって生まれる衝撃力は相当なものがある。詩篇の舞台の具体性がまとまるようでまとまらないところがあるが、「すべての希望が一幅の戯画にすぎず」「すべてはみせかけの玩具」「高処という高処を犯し／世界は渺茫となめされていくだろう」といった詩行に目をつけて読めば、具体の抒情や叙事ではない、かなり普遍的なレベルでわれわれの時代の世界を捉えた高邁な詩と読める。

余談だが、当選作を決めるにあたり、下品な言葉をふくむ詩は当選作にふさわしくないという議論が出たが、中世の和歌ならいざ知らず、今の詩についてそういう規制が有効とされることはどうかと思われるので、今後のこともあり、一言書き留めておく。

優秀賞では、斎庭京壱さんの「想ひ出煙草」他三篇は、独特の発想力と語り口で際立っている。この語りの呼吸を辿るだけであらぬ世界に誘い込まれるような妖しい魅力がある。「虚ろふ紙芝居少年」の、背中に「一瞬のちの未来が／鬼のことばで書いてある」という詩行の恐怖の鋭さ。異才であることは間違いない。自分の生きる思想を軸に仕込んでさらに緊密に結晶した作品世界を、と望みたい。

溝口愛子さんの「就眠儀式」他三篇は、かなり散文に傾いた言葉をつかって書かれているがどの行も強く的確に語りたいことを語り出ていて、その連なりの勢いに否応なく説得される。どの行もどの行も暗い世界に切り込み、おぞましい暗闇をかかえて苦悩する心を暴き立てる。「両手と両足に取り付けられた糸がピンと張られる／雲の奥に潜む大女が糸の先を握って私というガラクタを操る／ガラクタの手足がめちゃくちゃ踊りを繰り広げる」（「徘徊録」）このいたましさはどこに向かおうとしているのか。

土田多良無季さんの「禍根」他三篇、九二歳にしてこの確かな造形力に驚く。戦争という重い思い出の担い方にきびしく切なるものが感じられる。「今日も明け方の夢で／白い群集に手招きをされる」（「禍根」）。戦いはまだ終わってないかのようだ。

佐々幸子さんの「目／灯台」他三篇は北海道という土地とそこに日々を送る生命とが融け合う姿をよく捉えている。風景に情感と重量感があり、寂寥が大地を飛び立とうとしている。

福田静代さんの「原爆ドーム」は冒頭の三行が決まっているのが強い。「この土地は時の中心にあるべきだ／この場所は空間の中心になるべきだ／この建物は魂の中心にもなるべきだ」怒りの感情と沈鬱な思考との縺れ合いが硬質の詩行を作っている。

奨励賞では、二条千河さんの「天守閣」、これは選考で第一に推していたもの。城攻めの兵士のイメージを巧みに使い、認識と行為が複雑に交錯し互いに咬み合う有様が流れるような叙述のなかに形象化されている。詩の回路が先鋭にとがって運命の眼差しを招来するところ見事。内容的に詩ではない、という意見があったが、詩の概念のストライクゾーンを狭く固着させてしまうとそのゾーンの内部は退嬰するしかない。

大江豊さんの「木登り」は、自分の詩の書き方を十分に知っている書き手の存在を感じさせる。軽やかなリズムがよく歌っている。発想もみずみずしい。

山川方子さんの「天に唾する」他三篇も、自分の歌い方を獲得している人の、無理なところのない歌い振りで、読んでいて静かな幸福感を授かる感じがする。

川畑和嗣さん「せせらぎの追想」、机の引き出しから清冽なせせらぎが流れ出る、そこに不始末をした弟の面影が融けあうというイメージは抒情の光と翳を織り合わせて見事。

中村礼子さん「透き通った投石」、夢のような時間によって蒸留された悲しみが感じられる。

三浦睡蓮さん「アイスクリーム」、他人を想う気持ちが素直な表現に現れていて好ましい。

川田政通さん、詩としてどう受けとめていいのか分からない部分があるが言葉は異様に殺気立っている。

佐山広平さん、青春と観念の交錯をうたう詩風は今回も健在。

三重ユメオさん、視点の新鮮さと書きぶりの不器用さの取り合わせの妙。

光城健悦さん、小石を飼うという着想のユニークさに惹かれた。

佳作では、久瑠璃窈子、桜はるらん、坂口祐子、藤原ジュン、上田卓、岡崎博成、牛坂夏輝、糸桐カイト、後藤順といった諸氏の作品に光るものを感じた。

なお、今回、こちらの選考の制限で拾うことができなかったが気になっているものとして、尾崎まことさんの「反響」、金裕美さんの「傘」、ナガノサヨコさんの「溺愛あるいは妄想」がある。

賞の選考では、多数の候補を比較して選び出すという都合上、言葉遣いの巧さは大前提としても、張りや艶のあるもの、勢いや可能性を感じさせるもの、異彩を放って目を引くものが有利となる傾向が当然ながらある。しかし詩を書く営為の中ではいつもいつもそんな堂々たる作品ばかり生まれるわけではない。詩を書くという行為特有の静けさの中で生まれる小さな作品はときには不格好で無造作な姿をしていて他人の目にはとまりにくいかもしれない。パブリックな評価の尺度に乗りにくい種類の作風もある。そういう生成のひとつひとつもやはり詩作の生理の波打ちにとって大切なのだということは忘れないでいたい。自分の道を偽らないことである。

選考委員紹介

河林　満

かわばやし　みつる
1950年福島県生れ
中上健次に師事
90年「渇水」で文学界新人賞・芥川賞候補
他に「穀雨」「黒い水」「年譜」「海からの光」など
詩集に「風景その呪縛」がある

池田　康

いけだやすし
1964年愛知県生れ
名古屋大学大学院文学研究科修了
詩集「ロマンツェ」1994　詩集「星を狩る夜の道」2005
詩集「星を狩る夜の道」で文芸思潮詩人賞受賞
戯曲「御曹子のピクニック」など数篇
美術評論ほかをホームページに掲載
http://www6.ocn.ne.jp/ ～ artnote/

五十嵐　勉

いがらし　つとむ
1949年山梨県生れ
早稲田大学文学部文芸科卒業
「流謫の島」で第2回群像新人長編小説賞受賞
「東南アジア通信」「アジアウェーブ」編集長
「緑の手紙」でインターネット文芸新人賞最優秀賞
「鉄の光」で健友館文学賞受賞
現在「文芸思潮」編集長
「詩誌『帰郷者』の栄光と悲劇」を連載中

選考会風景

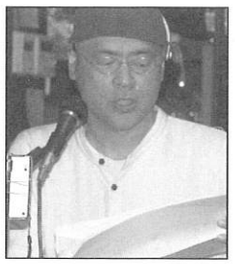
王国

まばらな果樹の潮枯れの地に
胸とよもすなつかしの風が吹き寄せ
〈どうにもできない自然〉の姿なき声が　旅の終わりを告げるのを知ると
わたしらは草葉の馬や
苦い根をうつ唐棹を摑き、腰を伸ばして
段畑のきりぎしから呆然と沖を見遣る
黒い巌の怒りに凝った波の山塊が水平線の彼方にひとつ、またひとつ
天を突く蓬髪を無言でめりめり駆り立てながら遠眼鏡に覗く別世界の風景のように
風化の岸の
辺土めざして起ち上がる
波打ち際ではすでに守りの最前線は破られ、防波ブロックは堤の上に投げられて
気まぐれな波の発作の指先になぶられている
小屋にもどったわたしらは、出発の準備を整える
持ち出すものとてすでに甲斐なく
ただわずかな飲み水と赤茶けた蟹の、なけなしのこころに似た戸惑う機械ひとつを連れて
断層の崖を這い登る
水の巌はいつまでも遠い
遠い風に見えて　次々にたぎり生まれ
水はいつまでも来ない
来ない風に見えて不穏の沖から押し寄せては砕け
昼下りの岩棚からま紺の尋に釣り糸を垂らし
世の終わりを臨み見る長閑な驕りに晴れて
崩れるひな壇もろとも逃げ遅れる眼下の者らを築地に彫られたレリーフの
泥人形のようにゆったりと呑み込んでいく

すべての希望が一幅の戯画にすぎず
わたしらではない
翼をもたない
蟹のように自由でこわれやすい魂のなけなしの親しさだけが
守り通すべくもない
惜しむべきただひとつの最後の無垢
古い徽章に飾られた
今は亡き者たちの集い遊ぶ
木造兵舎の屋根屋根を越え
新しい教義に目覚めた祭主の棲む
金箔の寺院を越え
うねうね続く唱名踊りの
影深い谷を見下ろす山窩の宿りを穢し
飢えながら死にながら殺しながら　いとしい死を抱きしめながらわたしらは逃げる
おどけた破滅を配る荘園の似姿をもとめて
見えぬ姿で踏み迷う疎林の藪に
体液はさらさらと血のかどをめぐり、分厚い水の沈黙を呼ばう
水は積み重なる迷宮の謎でどこまでも追いかけてくるだろう
苔むす絶望の河も
影馳しる執着の台地も
すべてはみせかけの玩具（ジオラマ）
飽くことを知らない緻密の触手はやがて生けどるものらの階梯を埋め
高処という高処を犯し
世界は渺茫となめされていくだろう
星のすな絵またたく　満ち足りた幾千年のねむりのあと
ある日　にび色の雲のはざまに
燃焼ののちを燦爛と運ぶあの醒めたなつかしい風に似た
光り輝く無人の家がその姿をあらわすまで

第3回「文芸思潮」現代詩賞 当選作

富 哲世



とみ　てつよ

1954年神戸生まれ。獅子座　O型。
詩集「血の月」（蜘蛛出版社　1993年）
詩集「天人五衰」（ルナ企画　1999年　私家版）
詩集「殺佛」（ルナ企画　2000年　私家版）　他
歌集「死明」（窓月書房　2002年）
評論・他「スペイン内戦とガルシア・ロルカ」（共著　南雲堂フェニックス　2007年10月）など
現在詩友たちとやっている月刊研究誌に月評と詩を連載している。所属同人誌等なし。

受賞の言葉　富　哲世

晩学にして浅学の身としては、詩の未来の展望を見定めるどころか、その幻影の後姿を垣間見ることすらとてもかなわないが、若し詩の魅力とは何かと問われれば、現れる作品としてまた情況としても、詩の持つ多彩さであると答えたい。幾人かの傑出した才能によって展望が齎され、優れた詩論や詩学が日本の詩をリードすることがあっても、あるいは優れた作品が詩の一時代を画するということがあるにしても、作品の現れの総体の中でそれらは相対化されていくように、撒播の土壌から詩は常に多彩に起ち上がって来るのだ。その多彩さに触れていくことはとても楽しい。

一編の詩の実現は、相反する答えを同時に孕む行為であるように思える。詩のことばは、伝統や美の規範の支配に執拗に抗いつつ、しかも自らそれに続くものであることを欲望する。詩の意識は、埋没的な日常を激しく憎みながらも、日常の持つ一期一会の陰影への細やかな視線のなかにこそ、詩の命が育まれていくことを知っている。それらはすべて、人の営為のラジカルな多彩さの証明にほかならないだろう。

今日詩を書く者の多くは孤独に、あるいは僅かな盟友とともに自らの詩作の磁場を拵えている。詩を書く者は独力でことばと格闘しながら、常に自身であることの場処に飢えている。此の度のわたくしの受賞が、みおつくしのひとつとなって、少しでもそういう書き手たちの飢えを充たす励みに役立ってくれればと希う。

第3回「文芸思潮」現代詩賞
優秀賞

土田多良無季

禍根

殺意は竜巻か
兵士は蟻か匍匐する

近眼ゆえにか
近眼ばかりが召集され
視界は霞の只中で

命はごう毛程の確かさ

最期は最期で際限もなく
宇宙へは死臭だけが届く

エステルに酔わされていた等と
帰還船で語り合うのは
戦場妻たちだけではないはずだが

二等兵や少尉は
敗れるまで気付きはしない
大将や元帥は
気付いたことすら気付きはしない

先陣訓は〝自決すべし〟と
ふ虜をことさら禁じたが

火炎放射器で
焼かれながら生き残った者に
訓などは空念仏だ

死に損ないとしての負い目は被差別者

隠せることをすべて隠し
人肉食をも隠して

六十有余年

今日も明け方の夢で
白い群集に手招きをされる

「お前(めえ)らは誰(で)えなんじゃ」
妻も驚く寝言で覚醒する日々

九月で九十二となる
寝苦しい夜ども

しだたら　むき

1915（大正4）年9月29日生まれ（92歳）
岡山県新見市出身　高等小学校卒
日中戦争従軍経験有
航空機製作会社、自動車制作会社勤務
定年前後の50歳ごろから、旺盛に詩作をしていた息子に触発されて、詩作を開始。遅筆のため作品は少ない。
同人誌に入るも原稿が遅いため出たり入ったりで腰が落ち着かず。現在の所属はない。
息子の言によれば、「時々記憶が消えていることがある」とのことであるが、いたって元気ではある。

紙の神に

おまえがくれた
瞳が
識別するのは
赤と黒と
真昼の
天空の
昴

お前がくれた
耳が
聴取できるのは
蟷螂の
鎌のきしみと
川ガラスのくちばしの
擦音

おまえがくれた
鼻は
言の葉の
腐臭と
ハンマーの発する
熱の暑さと
霊魂の冷たさを
かぐこともできる

指向は
思考を超え

僕が作ったもの
義眼の
瞳

歌は流れているのか
心に共鳴する
歌は

受賞の言葉　土田多良無季

息子とは、二十八の歳の差があります。その息子の詩作の活動に触発されて、五十歳ごろから詩を書き始めて、四十年ばかり詩を書き続けてまいりましたが、その多くはメモ書きの域を出ず、たいていは広告の裏に書きとめたり、印刷物の裏に書いたりで、散逸いたしております。

「禍根」、「紙の神に」、「錦の座蒲団」は、たまたま息子に浄書してもらったので残っております。

「禍根」は、息子が、「戦争の記憶の消えぬうちに、何か書いておいたら」と勧めてくれたので、ボケの少ない時に、たどたどと、一週間がかりで書いたものです。

「紙の神に」は、神のあふれる国の神を揶揄してみたつもりです。

「錦の座蒲団」は、昔聞いた秘事について書いてみました。

体調の良いときばかりではございませんので、なかなか詩作も難しくなってまいりました。これからは、息子の力を頼りにしながらの、創作活動となると思います。

最後の詩心の燃焼の成果として、冥土への土産ができました。ありがとうございました。

第3回「文芸思潮」現代詩賞
優秀賞

溝口愛子

みぞぐち　あいこ

1977年生まれ。長崎県大村市出身。国際情報科学専門学校　情報ビジネスコース卒。
川文夕鶴の筆名にて第二回現代詩賞で奨励賞入選。
2005年　長崎新聞社主催の文芸賞で佳作入選。（同年の1月18日の長崎新聞に本名にて掲載）。

就眠儀式

夢という夢に明かりが灯る夕べ
ヤマアラシが終の歌をうたうから
私の中の釣鐘草が黄金と陽の色に燃え上がる
頭皮に生えた無数の蔓草が激昂しながら夜空の点を捕まえるとき
私の獅子は暁色に燃え上がる

深夜の薄暗い便所で便器の傍らに膝をつき真っ黒い穴倉を覗き込む時
世の終わりと始まりを目の当たりにした
洞窟の壁面に夢という歪んだ文字を腐食した黒ペンで書き殴り書き続け遂には文字が文字ではなくなった
枕の内側に潜む羽根そっくりの夢を求めて脳の内側を食い破る
何故に部屋の中がこんなにも暗い
カーテンの隙間から差し込む一筋の明かりでさえも私の眼球を銀の針で貫くから
私は千切れそうな目蓋を死に物狂いで閉じたのだった

白い錠剤を電源の切れたポットの湯で暗い穴倉に流し込む
室内に充満する悪鬼たちが恐れを含んだ目をして熱気とともに荒れ狂う
電気スタンドがテレビが本が本棚がビデオテープがパソコンがクローゼットが人形たちが
けたたましい声で笑い出すのは何故か
眠りが時折黒い手を伸ばして私を遠ざけるのは何故か

時計の秒針がカチカチ耳を鞭打つのは何故か
一粒の錠剤が脳内を駆け巡ったのに
未だシーツが翻弄するのは何故か
目蓋の裏側で獣どもが歯を食いしばって囁くから
天井と床の合間の黒を指で掻き毟った
錠剤を投げ込みにポットの前へ走る
暗く蠢く喉の奥へ二つ目の錘を放った

受賞の言葉　溝口愛子

応募させて頂いたのは今回で二度目となりますが、一度目には奨励賞を頂いて窓の外をぽかんと眺めるほど驚き、そして今回は何と優秀賞を頂いて目が点どころか無くなってしまうほど驚いております。
詩を書き始めてまだ三年程しか経っておりませんが日々詩を読み、詩を書くという習慣をしつこく続けている次第です。
詩を書き始めたきっかけは詩人シルヴィア・プラスの存在を知ったことが大きかったのですが、こんなにも早く公の場で認めてもらえる日がこようとは想像すらしていませんでした。
私にとって詩は唐突と頭の中で鳴り響く言葉の風鈴みたいなものです。眠れない時に眠るための錠剤を歯と歯の間で押し潰す瞬間や、氷を入れた冷たい水に手を浸した瞬間にも不意に訪れます。
自分の立ち位置すらもよく分からぬ私ではありますが今回光栄にも優秀賞を頂いたことで、詩に対する自分の成長を確かに実感することが出来ました。私の詩を選んで下さった審査員の皆様、関係者の皆様にこの場を借りて深くお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

水に、眠る

衣服を着用したまま浴槽に沈む
水面擦れ擦れで目を開けると空間が歪んで見えた
朝方の青が差し込む時間は空気中に魚が舞っているから不思議
右手を揺らめく羊水から差し出すと魚が指の先に寄ってきて口づけをする
鈍色に光る剃刀は水底に沈んでいる
お前は私の左手首に口づけしようとしているがそうはいかないよと嘘ぶく
皮膚の中の血管が透けて見えるから不思議
青い枝の絡まりが林を作って私を閉じ込めるから
羊水の外に未だ出られないでいる
剃刀が浮上してきて私の頬を撫でた
刃は労わるように皮膚を裂くから
いつまでもそこから私は動けずにいる
薄い肉の塊で出来た容器が機能停止の時刻が来るのを心待ちにしている
だから剃刀は濁った声で笑いながら洗面器の中へ身を投じる

浴槽の水から出る明け方
フローリングの床を爪先立ちで歩く
続く帯状の水滴は
おぞましい沼の精が残す痕跡
前髪の先から落ちる滴りは剃刀が残す嘲笑い
またも絶てなかったことを
水たちが囀る
囀りは連鎖する
私の呼吸の内へ

喚き狂いなじっている
髪を掴んで逆立てると
鏡の裏で黒がざわめく

第4回　文芸思潮 現代詩賞　作品募集

文芸思潮では、清新な詩作品を募集します。志操が荒廃し、言葉の真の力が失われつつある現在、日本語の奥底に流れる感情の根を洗い、美しい言葉として表現の結晶体に高める文芸の営為は、今こそ再興されねばなりません。言葉の芯をなす強靭な詩精神を鍛え、人の心の底に響き、永くそこで生き続ける言魂の作品を期待します。

作品募集要項

趣旨●真の言葉の力に溢れた詩作品を賞揚し、詩の創作エネルギーを顕彰する。由来や伝統に根差しつつ、現代に造形する、美しい日本語によって、言語の精神エネルギーの復活をめざす。また埋もれた才能や作品を掘り起こし、広く社会に知らしめ、作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルの詩作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人3篇までに限る(3篇の場合まとめて送付のこと / 添付別紙は全体に対して1枚のみでよい)。

応募資格●不問

応募規定●

一篇は400字詰原稿用紙5枚以内(原稿用紙使用の場合は必ずA4原稿用紙を使用のこと。B4は失格)。

ワープロ原稿はA4用紙を罫線なしで横に使い40字×30行で印字。必ず閉じること。別紙に①応募部門(現代詩賞応募作品と明記のこと)②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日(年齢・生年月日のないものは失格とする)⑤〒(郵便番号は必ず明記のこと / ないものは失格)住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらを厳守しない場合は失格とする。

応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと(コピー送付が望ましい)。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社
「文芸思潮」現代詩賞　係
TEL&FAX　03-5706-7848　E-mail　asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●文芸思潮現代詩賞■賞状・トロフィー・賞金3万円
優秀賞■賞状・賞メダル・賞金1万円
奨励賞■賞状・賞メダル　佳作■賞状・記念品

選考委員●河林満・池田康・五十嵐勉

締切●2008年5月31日(当日消印有効)

発表●1次予選通過作品は2008年9月発売の「文芸思潮」25号に発表。
受賞発表・作品掲載は11月発売の26号、およびインターネットに発表掲載。優秀作・奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●アジア文化社

※主催者から　痛切な心の叫び、天を射抜く鮮烈な言葉、水晶のように輝く言葉の結晶、流麗な音韻の調べ、言魂(ことだま)の響きを期待しています。

第3回「文芸思潮」現代詩賞
優秀賞

佐々幸子

トッカリショ

胸の鍵穴に　鍵を差し込んだまま
太ったトドが　海を拭いています
海が　きれいになる分だけ
夕日が　透けてみえます

船底に膝をついて
未知の海底の赤い血を盗んだのではありません
大海原の精気を盗んだのでもありません

内側の燃える炎を静めるために
闇がほんのすこし　めくれただけです

トドよ　トドよ
屹立するガンケから　突出する骨を
滅びを遮断する　険しいガンケを見ましたか

裸足になって手さぐりで
貧しさという位置から信じる時間を知りました
研いだ渾身の斧で削った　断崖絶壁にやっと降り立ったとき
オッカナクテ目を瞑り　這いつくばって
カムイヘ　ひれ伏して　祈ることをしりました

沈む陽を　胸から掬って
火の色の鍵を　海に差しこみました

『ビンタを張りたい　夕焼けです』

白いハンカチ畳み損ねて　羽を広げたカモメの親子
ダイビングに備え身を反らせるトドの群れ
沈むとみせて海辺がもやって　朱が朱を呼んで
黄昏を　反転させます

北の国の知恵ある先人が呟いた
この岬の上で
この薄くれないの　暮色のなかで
『オイナを謡った』

目／灯台

目の奥に穴がある
深い洞窟だということが
その静けさでわかる

二重まぶた
やさしさを目深にかぶった
めんこいなまえ

こんこんと湧く泉がある
澄んだ水だということが
その瞳をみればわかる

人はときどき船を漕いで
心の入り江を出たり入ったり

むんつける悩みやら
落ちるぞとみがまえて
ざぶんと海

やっぱり室蘭は目がわるいね
見つめ合うために

風がメガネをかけているよ

洞窟の中は海だね
目の中がいつも濡れている
うん
四方八方　ずっと　ずっと　海
さみしさを　しんしんとつもらせて

晩春の

地球岬

濃霧

ささ　さちこ

昭和8年9月5日生まれ。74歳。故郷はと聞かれたら岩手県と答えます。大好きだった祖母と暮らした幼い日々が私の故郷です。
高校卒業後、市役所、地方新聞社、会計事務所　勤務

受賞の言葉　佐々幸子

海が好きで、四方八方海に囲まれた室蘭で50年近く住んでおります。祈りながら、いつも遠くまでの航海を夢みている心はいつも放浪者です。

過年、ウタリ協会の皆様とご一緒させていただきまして舟で沖へ出ました。息をのむほどの海岸線の美しさと、恐れおののくほどの厳しいガンケに鳥肌がたちました。

この果てしない海の上の人間の小ささに。海の広さに。この世の広さに。海底の深さに。知らぬ人生の底知れなさに。震えてしまいました。

「トッカリショ」を選んで下さった先生ありがとうございました。嬉しかったです。どうしてだか少し泣いてしまいました。感謝です。

第3回「文芸思潮」現代詩賞
優秀賞

斎庭京壱

虚ろふ紙芝居少年

あなたのこの薄い背中には
硝子で編まれた蝶々のはねが潜んでるのでは
なくって
もう既に 一瞬のちの未来が
鬼のことばで書いてあるのよと

矢がすり袖で唇包んで
見知らぬ婦人は囁いた

どんな色した洋墨で
つぎのわたしが描かれて
どのくらいの筆圧で
塗り込められてるのか

誰が水飴を練りながら
微動だにせず見入っているのか
握る硬貨すらびいだまにかわって
私の眼窩で軽やかに
あかしろみどり
安っぽく踊る

ああ
怖いから
まだいますこし
後生ですから
次の紙を
めくらないで！

からころころん

あなたの薄い背中には
硝子で編まれた
蝶々のはねが潜んでるのでは
ない
もう既に 一瞬のちのことが
鬼のことばで書いてあるのよと

やがすり袖で唇包んで
見知らぬ婦人は囁いて
懐筆をそうっと探り
そうしてこうしてもとどおり
うしろにまわって影になる

ゆにわ　きょういち

1987年6月生まれ。
熊本県立第一高校卒業、現在自宅にて大学浪人中。
尊敬している詩人は宝野アリカ・佳宵布由。
HP　http://blackplum-salome.fool.jp/

想ひ出煙草

さいごに
老人たちが艶やかにわらって灰皿へ伏せた夢の吸い殻を
墓守りのおれはひそかに一本つまみ
だして
眼球にくわえ
瞳ですうとのんでみた
ああ
かわいらしいセーラー服のえり
愛した唇
鳥居の下をくぐる子らは
まだ畏敬なんて言葉をしらずに
鬼ごっこをし

縁側
碁盤の遥かうえ 夜に一手打たれた
会心の
月
その晩は後手のかちだったのだ

夢吸い殻は
ほんとは墓の廻りのただの細草だ
彼らが得たあらゆる素敵なものをふくんでいて
おれにとっては魅惑的な
心痛む毒だ

これまでろくな生き方をしなかったおれは
爺さんたちの最期の夢のおこぼれを頂いて

羨んでは

狂ったように石碑を拝む

受賞の言葉　斎庭京壱

昔から本の虫で、中学から放送部で朗読をしていたこともあり、言葉というものが大好きです。が、文章を書いても出すのは常にHP（幾つか持っています）上のみ、高校で掛け持ちで文芸部に属した時期でも短編小説一つを部誌に載せたきりであった為、自分の言葉が他の人、特に大人の方にはどう伝わるのか解らない状態でした。今回拙いとは言え詩を褒めて頂けたのは、だから嬉しいけれど意外なことでもありました。

ところで応募した作品は揃って薄暗い詩ばかりですが、書いている間は端から見たら気持ち悪い程『ハイ』な気分です。

もし身体の中が疼いて頭に言葉が浮かんだら、書いてみることをお勧めします。それはきっと頭上の自分からの天啓です。

夜に書いた手紙のようなものでとりとめのない文面が多いことと思いますが、きっとそれには素晴らしい詩になる可能性が含まれているのでしょう。

自作を今になって読み返すと恥ずかしい部分、こうすればよかったと反省する部分は幾つもあるのですが、それはそれで良い思い出になりました。

詩を書くにあたって気をつけていることがあるとすれば、それは「世界を持つ言葉」にする事です。

言葉に世界を作らせるのではなく、世界を言葉に持たせられるものにしたいのです。自分に課すには難しいテーマですが、妙に心地よい足枷なので愛用しようと思います。

原爆ドーム

この土地は時の中心にあるべきだ
この場所は空間の中心になるべきだ
この建物は魂の中心にもなるべきだ

絶句の時――その刹那
風景は反転し落下したまま凍りついた
この極限の不条理を誰が受け入れるのか
うららかな春の日に凍えはいまだに溶けず
そこには憤怒と涙の河が流れていた
瞬時焼き尽くされた生命たちは安らかになんか眠れない
沈黙の抗議は黒いドームのなかで赤々と燃えている

ドームの内庭の瓦礫にはドクロの残映が光っているし
レンガの壁には若い男の眼差しが張り付いている
その前の空間には髪の長い女の影が風と重なっている
微風の春の午後だというのに
英霊たちは安らかになんか眠れない
赤い涙の河が時空に漂っているかぎり……
瞬時に焼き尽くされた極限の不条理があるかぎり……
究極の空洞を修復する術を誰も知らない
誰が花束をささげても赤い河は消しえない
凍えたまま虚空へ向かって流れている

そして人類に向かって指を指す
その余りに深い罪の意味を――

にも拘わらず世界の地図に血の乾く暇もない
憎悪は人のどこに潜んでいるのか

貧困や偏見の谷に眠っているのか
その萌芽はどんな動機で発芽し成熟していくのか
憎悪はどこからやってくるのか
途方もない人の自我への執着からか
その果てない心の煉獄はどこへ向かい収斂していくのか
けれど果たして鳥たちは憎悪を創りだすだろうか
けれど果たして獣たちも憎悪を貯えるだろうか
たとえ雨の恵みがなく飢餓にかられたとしても
彼らは不平も言わず苛酷な自然を受け入れている
むろん武器など造らず心の煉獄も知らないだろう

この建物は武力の究極の残骸
凍えた抗議が時空に流れている所
私たちはこのドームの只中にひざまずき
憎悪の芽を自我の内側に折り込んで
慈愛の祈りに向き合わなければならない
この土地が時の中心にあるべきだから……
この場所が空間の中心にあるべきだから……
この建物が魂の中心になるべきだから……

第3回「文芸思潮」現代詩賞
優秀賞

福田静代

ふくだ・しずよ

1947年東京生まれ、東京育ち。
学習院女子短大卒業後、東急航空へ入社。突然、虚構の世界に真実性があると錯覚し舞台芸術学院（夜間部）、劇団ＮＬＴに在籍するが、協調性と体力に欠け挫折。その後、フリーで機関紙編集に携わり、彫金と七宝焼き等の工房を開設する。この間、手描き友禅を習得するために、一年余京都へ行く。
詩を書き始めたのは小学校の頃だが、表現手段として取り組んだのは23才の時から。詩集は1975年「ｉｆ画廊」、1980年詩集「逆流の紅蝶」、1983年詩集「四言」、1992年詩集「落下風景」、1993年「飛鳥へ」等を私家版で創る。
1993年から夫の仕事の関係で岡山、広島へ転居。

受賞の言葉　福田静代

振りかえれば、長年飽きもせず詩を書いてきたと思います。けれど、詩作に支えられてきたのは私の方だった様な気がしています。

十代の終わり頃、私は九死に一生を得た体験があり、元来単細胞だった私の人生観は一転して陰影を宿し、死が自分に向かって的を絞っているような感覚が離れなくなりました。

いわば、不安神経症的スパイラルに陥ってしまった私の精神状況のバランスを整えてくれたのが、詩の存在であったように思えます。

詩「原爆ドーム」を自動速記的に書いたのも奇異な体験に引きずられたからでした。数ケ月前、某大学の通信過程の課題のため、資料収集として現場を訪れた訳ですが、ドームに近づくにつれ、訳もなく涙が溢れてくるのです。その後、その訳を理解しました。私が資料として撮ったものは、どうも心霊写真のようでした。この時、私は被爆者の絶望的憤怒と悲しみを記述したいと思ったのでした。

「鬱病女の綴りごと」は、等身大に近い私の心境に芝居風の構成を試みてみました。

詩は評価を求めるために書いているのではないと自戒はしていますが、組織にも属さず自分だけと対話していると、孤立感と停滞感を感じざるを得ません。けれど、今回私の作品に対し、少なからぬ御理解を頂けたことで私も心を拡げ、また、先へと進めそうです。

今後、年齢を重ね老いを迎えた時、そこからが本来的真実の入口と自負し、その深く険しい森と峰へと分け入ろうと思っています。

鬱病女の綴りごと

「手首を切れば簡単よ。もし悩みがあるのなら……」
とあの女が言った

綱を手で握りしめ人生を投げずにたどり着くのはどこ？
たどり着いたとして　そこに何をみつけるの？
砂で練り上げた成功という名の虚妄をか
フリルにつつまれた大儀という名の偽装をか
あるいは桜色した幸福という名の欲望をか
さあ！　それらに手が届くよう恥を掻き消して
人生を投げないエチュードに励もう！
老いも若きも人生のレールから脱線しないよう……

他人は誰も振り向いたりしない
落ちゆく者のすがたなど
他人は誰も聞いていたりしない
堕ちていく者の悲鳴など
他人の人生は他人のものだから

「手首をきれば簡単よ。たとえ悩みがあったとしても……」
あの娘は言う

柩はいつも出発する
この時に　また次の時に向かい
時は口を開いて命を吸いこむ
不毛な柩！　滑稽な消耗よ！
誇りあるものは虐げられ

権力の膝に屈する者に酒宴は用意されている
美しきものよ！
おまえは腹黒い嫉妬と打算に食いつくされる
この世は柵に囲まれた養鶏所のようなもの
この場から誰も逃れられない

はかなき夢の闘争よ
綱をたぐり山の峰を登り
いったい何を犠牲にするんだろう
桃源郷こそがエゴの罠でないと誰が言えようか
はかなき夢は夢をかさね
幻はまぼろしの山々を創っていく
たんなる欲望の残骸に人は惑い
めくるめく至福の闇夜に己を晒す

「手首を切れば簡単よ。もしも悩みがあるのなら……
　だけど、わたしはまだ死なない。死ねないわ」
とその女は謎めいて微笑んだ

第４回　文芸思潮エッセイ賞　作品募集

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な巽をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

趣旨●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化する。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格とする）

応募資格●不問

応募規定● 400 次詰原稿用紙 5 ～ 10 枚（原稿用紙使用の場合は必ずＡ４原稿用紙を使用のこと）。
ワープロ原稿は A4 用紙 40 字× 30 行で印字。必ず右上を閉じること。
別紙に①応募部門（「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記のこと）②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日⑤〒（必ず郵便番号を明記のこと）住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧ 400 字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらが厳守されていないものは失格となる。
応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと（コピー送付が好ましい）。

応募先●〒 158-0083 東京都世田谷区奥沢 7 － 15 － 13 アジア文化社
「文芸思潮」エッセイ賞係
TEL & FAX 03 － 5706 － 7848
E － mail　asiawave @ qk9.so-net.ne.jp

賞●エッセイ賞■賞状・トロフィー・賞金３万円
優秀作■賞状・賞メダル・賞金１万円
奨励賞■賞状・賞メダル　入選■賞状・記念品

選考委員●三神弘・福岡哲司・水木亮・五十嵐勉

締切● 2008 年 4 月 30 日（当日消印有効）

発表●予選通過作品発表は 2008 年 7 月発売の「文芸思潮」ウェーブ 24 号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終発表・受賞作は 2008 年 9 月発売の「文芸思潮」25 号（秋号）に発表掲載。優秀作･奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●アジア文化社「文芸思潮」

※主催者から　日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、短い文章でなければできないあなたのエッセイ作品をお寄せください。